

明治 16 年・朝鮮人留学生の 慶応義塾派遣について

法学部法律学科 4 年

磯崎敦仁研究会 4 期

政春 敦史

目次

I、研究目的	2
II、留学生の来日	3
III、慶応義塾における留学生	9
IV、陸軍戸山学校と留学生	13
V、学費問題	17
VI、甲申事変と留学生の末路	20
VII、むすび	24
参考文献	26

I、研究目的

1、明治16年の朝鮮人留学生

福沢諭吉(1835-1901)はかつて明治14(1881)年6月、明治16(1883)年6月、明治27(1894)年の3度に渡り、朝鮮からの留学生を自ら開いた英学校、東京・三田の慶応義塾に迎えている。本論文では、この内明治16年6月に来日した徐載弼(1864-1951)を中心とする留学生について扱う。

徐載弼以下の留学生は、慶応義塾において日本語の読み書きを学んだ後、陸軍戸山学校を始めとする日本の公機関において近代文明による新知識を学んだが、明治17(1884)年12月の甲申事変に多くが参加し、結果としてそこで若くして死亡してしまった。そのため、彼らを中心的に扱った先行研究は日韓ともに少ない現状にある。そのため、本論文ではこれら留学生の日本における教育を改めて検証し、どのような意図を持って留学生は来日したのかを明らかにする。なお、引用する資料は現行の字体に改めた。

2、先行研究

(1) 留学生に関する研究

明治期・朝鮮王朝末期に関しては、甲申事変や事変を主導した金玉均(1851-1894)に関する研究は日本・韓国で盛んに行われてきているが、そのいわば脇役たる朝鮮人留学生に関しては、研究は決して多く行われてきたとは言えない。その中でも、朴己煥の「근대초기 한국인의 일본유학 -1881 년부터 1884 년까지를 중심으로- (近代初期韓国人の日本留学 -1881年から1884年までを中心に-)」*일본학보* (40) 1998年は、明治14年の留学生を中心に、日本の資料を参照しつつまとめられた研究であると言える。また、日本側でも、田中宏「朝鮮留学生と福沢諭吉」永井道雄、原芳男、田中宏『アジア留学生と日本』所収、日本放送出版協会、1973年や、阿部洋「福沢諭吉と朝鮮人留学生-1895年朝鮮政府委託慶応義塾留学生の場合を中心に-」*福沢諭吉年鑑* (2) 1975年、といった先行研究が挙げられる。

しかし、明治16年の留学生に焦点を当てた研究は見当たらない。これは、先に述べた通り、この時の留学生は甲申事変においてほとんどが殺害されてしまったことが理由であると考えられる。若くして死んだため、資料が残っていないためだ。それに対し、明治14

年の留学生は慶応義塾に兪吉濬¹ (1856-1914)、同人社²に尹致昊³ (1865-1945) がおり、彼らは近代朝鮮史上大きな役割を持ったため、研究の対象となりやすかったことが考えられる。また、明治 27 年の留学生は人数も多く、朝鮮国王高宗 (1852-1919) の 5 男、義和宮 (1877-1955) も来日するなど、その後大韓帝国・日本統治時代にも続く朝鮮人の日本留学の最初期のものとして、近代朝鮮教育史の研究対象となりやすかったことが考えられる。

(2) 周辺人物に関する先行研究

明治 16 年留学生の周辺には、日本には福沢諭吉、朝鮮には金玉均・朴泳孝 (1861-1939) といった人物がいる。この留学生が注目されにくかった原因の 1 つには、こうした歴史人物の陰に隠れがちであったことが考えられるだろう。これらの人物に関する先行研究は非常に膨大で、福沢諭吉は朝鮮に関するものだけでも相当な数がある。

具体的には、都倉武之「福沢諭吉の朝鮮問題—「文明主義」と「義侠心」をめぐって」寺崎修編『福沢諭吉の思想と近代化構想』所収、慶應義塾大学出版会、2008 年、琴乗洞『金玉均と日本-その滞日の軌跡-』緑陰書房、1991 年、山辺健太郎「朝鮮改革運動と金玉均-甲申事変に関連して-」歴史学研究 (247) 1961 年などが挙げられる。

II、留学生の来日

1、留学生派遣の経緯

明治 16 年、朝鮮人留学生はなぜ日本に来ることになったのか。彼らを送り込んだのは、当時参議交渉通商事務の任にあった金玉均や、朴泳孝である。金玉均は朝鮮政府内で、清国による冊封体制から脱却し、完全な独立国となることを目指す急進開化派 (独立党) の首領で、これ以前にも明治 15 年 3 月・及び同年 9 月に日本を訪れている。

金玉均は来日時に東京・三田の慶応義塾を訪問し、社頭福沢諭吉と面会しており、朝鮮の文明開化の方策について聞かされている。特に、2 回目の来日は 6 月に発生した壬午事

¹ 兪吉濬は更に米国にも留学、1885 年に帰国後『西遊見聞』を著し、甲午改革 (1894 年) 時に外務参議に就任した。

² 中村正直 (1832-1891) が東京に開いた英学塾。

³ 尹致昊は急進開化派として知られた尹雄烈 (1840-1911) の子。後に米国にも留学し、帰国後、独立協会を率いた。

変 4の謝罪のために来日した修信使朴泳孝に同行してきたのだが、その際に福沢は朴泳孝や金玉均らに文明開化のために「第一に、朝鮮の中央、地方を問わず全国から有為の青年を選び出して之を東京に留学させること、第二には、京城に於て新聞を発行すること、(中略)それから第三には京城に於て軍隊を調練すること」⁵を示し、金玉均らはこれを採用したという。

当時福沢はこの明治 15 年 3 月に発刊し、主宰していた『時事新報』上の社説でも、「今朝鮮国をして我国と方向を一にし共に日新の文明に進ましめんとするには、大に全国の人心を一変するの法に由らざるべからず。即ち文明の新事物を輸入せしむることは是なり。海港修築す可し、灯台建設す可し、電信線を通じ、郵便法を設け、鉄道を敷き、汽船を運転し、新學術の学校を興し、新聞紙を発行する等、一々枚挙す可からず。(下線筆者)」⁶と述べる通り、清国への事大主義・鎖国主義をとる朝鮮を文明開化に導き、独立国としての体裁を整えることが、日本の独立を守る上でも必要なことだと考えていた。福沢自身、幕末に欧米諸国で近代文明を見ており、そのことに大きな影響を受けているため、まず文明開化を進める隣国日本に留学生を派遣させ、若い朝鮮人を啓蒙しようと考えたのだと思われる。こうして、福沢の提案を金玉均ら急進開化派が受け入れたことによって、留学生の派遣は決まった。

2、留学生の渡航

明治 16 年の朝鮮人留学生は、5 月・7 月に数度に渡って慶応義塾にやってきた。彼らの存在は日本の公文書上にも現れる。それは日本海軍の軍艦比叡艦長笠間広盾から、中艦隊司令官仁礼景範へ宛てた報告文内である。明治 16 年 5 月 12 日、朝鮮人留学生 17 名は比叡艦に乗って日本に到着した。この報告文内では、長崎港まで便乗した日本人・朝鮮人の氏名が列挙されており、ここから留学生の氏名と年齢がわかる。

4 当時穏健開化策を取っていた閔氏政権を打倒すべく、国王の父大院君(1820-1898)が起こしたクーデター。閔氏と日本を駆逐すべく漢城で暴動が起き、死傷者が出るが、清国軍の介入によって収束。大院君は天津に拉致され、漢城に 3000 人規模の清国軍が駐屯することとなった。

5 井上角五郎『金玉均君に就て』中央朝鮮協会、1937 年、11 頁より

6 『時事新報』社説「朝鮮の償金五十万円」(明治 15 年 9 月 8 日付)より

【表1】明治16年5月12日に来日した留学生の氏名及び年齢⁷

徐載弼 ⁸ (21)	徐載昌(18)	金益昇(24)	安寧洙(18)	尹泳觀(17)	李秉虎(17)
金泳煥(22)	金漢琦(22)	申載永(20)	申応熙(24)	李建英(21)	白樂雲(21)
鄭行徴(24)	林殷明(22)	申重模(20)	李菊善(24)	趙昶教(24)	

この17名の姓名は5月21日付の『時事新報』雑報欄にも記されており、報告文と一致する⁹。留学生が来たことについては『時事新報』紙上にも取り上げられているが、その最初のもの5月14日付の雑報欄の記事「牛場卓造君」である。

「朝鮮政府より聘せられ漢城に滞留する牛場卓造君は、一時賜暇を得て帰朝するよし兼て報知ありしが、一昨日長崎よりの電報に同君は松尾三代太郎君と同道、日本へ留学する朝鮮生徒十七名を引連れ一昨日同港へ帰着したりとあり。」

以上がこの記事の全文である。留学生は、牛場卓蔵(1850-1922)に引率されて来日した。牛場卓蔵は慶応義塾の門下で、朝鮮政府に顧問として雇われ、明治15年12月28日に3ヶ月の滞在の後帰国する朴泳孝に同行する形で、同じ福沢門下の高橋正信と井上角五郎(1860-1938)とともに渡鮮した。牛場は慶応義塾で修めた洋学を教えることで、朝鮮に文明開化をもたらすことが期待されていたとみられ、さらに漢城府判尹(長官)に任じられた朴泳孝と協力して漢城において新聞の発刊を目指したが、開化派の動きを快く思わない守旧派の画策によって朴泳孝が漢城府判尹を罷免され、広州府留守となると、牛場は朝鮮の開化は難しいと判断し、帰国するに至ったのである¹⁰。また、元陸軍騎兵大尉松尾三代太郎も慶応義塾門下で、朴泳孝の求めで新式軍事訓練を担うべく渡鮮した者であった。

『時事新報』明治16年5月21日の続報には牛場と留学生の行程が報じられており、それによると5月8日に漢城を出発してその日の内に仁川・済物浦に到着し、比叡艦に乗り

⁷ 明治16年5月12日付の比叡艦長発中艦隊司令官宛電文、「内外国人便乗の義御届」(アジア歴史資料センター資料C10101006300)より作成。

⁸ 『時事新報』明治16年5月21日付雑報欄記事「朝鮮学生」によると、生徒取締の任にあった。

⁹ 報告文には20歳の金思轅という人物の名前も書かれているが、どういうわけか、慶応義塾には来ていない。

¹⁰ 記事「一時賜暇」とあるが、牛場は結局朝鮮に戻らなかった。

込んで12日に長崎に到着、16日に長崎を発って神戸に至り、そこで客船和歌浦丸に乗り込んで5月20日午前5時に横浜港に到着、東京に来たということである。留学生は東京に着くとそのまま三田の慶応義塾に入ったものと思われる。また、この記事では、上記【表1】の留学生の姓名を挙げると同時に、「猶渡航の志あるもの少からざれば次便にて来京するものもあらんと云ふ」と書いており、事実、7月4日朝に第2陣の留学生が客船名護屋丸に乗って横浜港に到着している¹¹。この時には12名が来日しており、その姓名は以下の通りである。

【表2】明治16年7月4日に到着した留学生の氏名

朴泳斌	朴準陽	朴泳祐	李春永	巖柱興	兪亨濬
鄭光徴	鄭蘭教	鄭勲教	李奎完	河応善	鄭鍾振

また、この直後の7月16日に高橋正信が帰国した際にも2、3人の留学生を連れてきており¹²、先だって6月28日に金玉均が3度目の来日をした際にも書生朴応学を連れてくる¹³。慶応義塾の留学生は総勢30人ほどとなったのである。

3、留学生の選抜

ここで問題となるのは、留学生がどのように選ばれたかである。留学生を選んだのは朴泳孝や金玉均といった急進開化派であることは論を待たないが、福澤に留学生派遣について知恵を授けられて彼らが帰国したのは、朴泳孝が牛場卓蔵の渡航と同時の明治15年12月28日で、金玉均はさらにそれより滞在を延長し、明治16年3月10日に王命で帰国するまで日本にいた。そして、牛場が留学生の第1陣を連れて帰国したのは明治16年の5月8日である。つまり、留学生の選抜も、朴泳孝の朝鮮帰国から牛場の日本帰国までの5ヶ月間に行われた可能性が高いということである。17人・12人と、留学生が2回に分かれて渡航したのも、この短い期間に候補者を募り、牛場の帰国に合わせて送れる人物を先に送り込んだという状況であったことが想像できる。

¹¹ 『時事新報』明治16年7月6日付雑報欄記事「朝鮮学生」より

¹² 明治16年7月19日付福沢一太郎・福沢捨次郎宛福沢諭吉書簡（『福沢諭吉書簡集』第

¹³ 明治16年6月14日付孟春艦長伊地知弘一発中艦隊司令官仁礼景範宛電文より（アジア歴史資料センター資料 C10101050300）

留学生がそれぞれどのような背後関係を持った人物であったのかは、明治 17 年の甲申事変について報じた『時事新報』明治 17 年 12 月 17 日付雑報欄記事「独立党の壮士」に一部記載がある。

「徐載弼は朝鮮学生の取締を為し学生中にて学行共に勝れたり。又白樂雲は本年二十三歳にして日本に来らざる前より堀本中尉の訓練を受け幾分か日本兵式を学び居り。戸山学校に入りし後は最も操練に上達し、文才は薄けれどもその勇壮果敢の気は常に学生中に秀でたりと。李建英は年二十二。是れも堀本中尉の訓練を受け一昨年朝鮮事変の際頑固党の為にその背を衝かれ創痕今尚背に印せり。此人は文才あれども其性質は執拗の風ありし。朴応学は二十九歳にして朝鮮にて有名なる武官の子なれども頗る文才に富みたり。尹泳観は金玉均の妹夫にして年僅に十八なれども才智に富み勇氣あり。最も射的に長じたり。林殷明は二十八歳、申重模は十九歳にして重模は体格偉大なる腕力家なり。また李秉虎は十七にして最も武事を好み遊戯も往々戦闘の状を為せりと。」

これは甲申事変で留学生の内、陸軍戸山学校に進んだ者たちが朝鮮政府の大臣たちの暗殺に加わったという電報を掲載した上で、戸山学校に進んだ者たちについて「諸学生に直接し其人と為りを知りたる人の話」として掲載された記事である。

この記事中から分かることとして、まず白樂雲と李建英の 2 人は、「堀本中尉」の訓練を受けたことがあるということである。この人物は陸軍工兵中尉堀本礼造（1848 - 1882）のことで、堀本は朝鮮政府顧問として派遣され、新式軍隊「別技軍」の訓練に当たっていたが、西洋式の軍隊を敵視する大院君や旧来の軍人の憎悪を受け、壬午事変の際に殺害されてしまった。この際に別技軍にも多くの死傷者を出し、事変後解体されたが、白樂雲や李建英の 2 人はその生き残りであるということだ。別技軍の創設・運営には開化派の閔泳翊（1860-1914）や尹雄烈が関わっており、従って別技軍の兵士だった者も開化派の考えを持っていたであろうことは想像に難しくなく、日本留学生として選ばれたとしても全く疑問はない。

また、尹泳観は金玉均の妹婿であると記されている。別技軍の兵士だった者に加え、開化派の親類も選ばれて派遣されたと考えられる。特に第 2 陣には、朴泳斌や朴泳祐、兪亨

濬など、朴泳孝や兪吉濬の親類であることがその名前から推測される人物もおり、また、徐載弼と徐載昌は実の兄弟であったという。他にも鄭行徴と鄭光徴、鄭蘭教と鄭勲教のように親類である可能性が高い者もおり、こうした開化派に近い若者が親族単位で選ばれたとも考えられる。

田保橋潔は、『近代日鮮関係の研究』の中で「独立党が政治的に殆ど無勢力であったため、留学生は郷班・中人・常民を以て大半を占められ、政府要人の子弟は全く見当たらない。」¹⁴と述べている。また、先行研究において朴己煥は、田保橋の発言を引用した上で「漢学を重視し技術を蔑視した当時の両班階級の意識と、科挙以外には出世の道がなかった制度性の制約を勘案すると、両班階級の留学忌避現象はあるいは当然だと見るべきだろう。自然に軍事関連の実用的な技術の受容が中心になった 1880 年代前半の初期留学は伝統的に技術の担当階級であった中人と、既存の秩序では出世の可能性の薄かった没落両班と常民がその中心をなしていたのである。(筆者訳)」¹⁵と述べている。確かに、留学生の人員を見る限り、当時政権中枢にあった閔氏一族はいない。留学生の出身地を知ることはできないが、漢城以外の地方出身者が多かったことも考えられるだろう。ただし、留学生が選ばれて日本に送り込まれるまでの期間は非常に短かったことを考え併せると、この際に改めて地方から人員を選んだとは考えにくく、金玉均や朴泳孝の周辺にいた開化派の若い人物が送り込まれたと考えるべきである。

4、日本政府の協力

留学生を日本に派遣することについては、金玉均らと福沢の間だけでの話であったようにも見えるが、日本政府の後援があったものと考えられる。第一に、留学生の渡航時に比叡艦が使われているが、これは比叡艦の笠間艦長の報告によると、「便乗之義竹添弁理公使ヨリ依頼有之」とあり、駐鮮弁理公使を務めていた竹添進一郎(1842-1917)の要請があったというのである。竹添は金玉均から依頼を受けたものと思われるが、金玉均は帰国後の明治 16 年 4 月の時点で国王からの信任も厚く、東南諸道開拓使兼捕鯨使の地位にあった。留学生の派遣は国王の内意を得ていたと考えられ、日本政府としても公的に軍艦に乗

¹⁴ 田保橋潔『近代日鮮関係の研究』朝鮮総督府中枢院、1940年、914頁より

¹⁵ 朴己煥「근대초기 한국인의 일본유학 -1881년부터 1884년까지를 중심으로- (近代初期韓国人の日本留学-1881年から1884年までを中心に)」일본학보 (40) 1998年、242頁より

せるという形で協力したものと思われる。

そもそも、留学生の派遣は竹添の前任者である花房義質（1842-1917）が、日朝修好条規が結ばれて間もない明治10年12月の段階で礼曹判書趙寧夏（1845-1884）に「留学生派出催進之書簡」¹⁶を送っており、富国強兵のために両班子弟を日本に派遣することを勧告しているなど、当初から日本政府としても朝鮮人留学生を受け入れ、朝鮮の文明開化を助けることは既定路線だったと言える。

Ⅲ、慶応義塾における留学生

1、福沢諭吉の対応

牛場卓蔵と徐載弼に率いられた留学生の第1陣は、明治16年5月20日に東京・三田の慶応義塾に到着した。福沢諭吉は慶応義塾構内にある自邸に留学生を収容した。福沢本人も書簡の中で留学生について言及している。その最初のもは、管見の限り、5月24日付で杉本恒吉という人物に送った書簡である。

「昨日華翰被下、朝鮮生徒共電信の实地拝見の義速に御取計被下、何時罷出ても不苦旨難有存候。直に相願度処、実は三、四日前こそ着京、今日尚未だ片付不申候。衣服の洗濯、小買物等も有之、暫時の処は外出も致兼候間左様御含置奉願候。右拝答に兼て御礼申上度早々如此に御座候。頓首。」¹⁷

杉本は電信関係の官吏だとされており、この書簡は福沢が留学生に電信関係の施設を見学させようとして、それを快諾されたことに対する礼状である。この書簡内でも言及されている通り、これは留学生が東京に到着した4日後のもので、衣服の洗濯や買い物などあってしばらく見学には行けないという旨が記されている。ここから分かることとして、杉本への施設見学の依頼は留学生が到着する前に行われていた可能性が高いということである。福沢としては、まず留学生に最初に文明開化した東京の施設を見学させることから始めようとしていたことが伺われる。また、この時期福沢家では福沢の長男一太郎（1863-1938）と次男捨次郎（1865-1926）の米国留学を目前に控え、福沢自身もその準

¹⁶ アジア歴史資料センター資料 B03030185000

¹⁷ 明治16年5月24日付杉本恒吉宛福沢諭吉書簡（『福澤諭吉書簡集』第3巻、291頁）

備に追われる中であつたが、こうして朝鮮人留学生の施設見学の依頼を自らしていることが分かり、忙しい中でも相当に留学生について気にかけていることが見て取れるだろう。

続いて福沢が留学生について言及するのは、牛場と高橋正信が帰国した後も 1 人漢城に残って活動していた井上角五郎に対して送った書簡の中である。

「過般渡来の生徒十七名は本邸に居り、飯田三次^{ママ}氏の請持にて世話致し、追々上達の者も多く相見へ候。」¹⁸

これは朝鮮に 1 人残った井上を励ます手紙の一部で、明治 16 年 7 月 1 日付である。この中で、上記のように留学生の状況を伝えている。まだこの時点では第 2 陣 12 名は到着しておらず、この短い中からも、徐載弼以下 17 人が三田の福沢邸にいること、飯田三治（1856-1917）が世話係をしていること、留学生の日本語が上達していることなどが読み取れる。

さらに、6 月 12 日に横浜港から米国留学に向かった一太郎・捨次郎宛の書簡にも留学生についての言及がある。

「朝鮮より生徒十七名、六月中に來り、尚過日十二名、尚高橋の歸る節にも両三名、昨今は非常の多人数なり。世話人は飯田三次^{ママ}へ托し、文の教育より眠食の差図まで、随分煩はしき事共に御座候。」¹⁹

ここでも井上宛の書簡と同様に、飯田三治が日本語教育や生活の世話をしていることが記されている。

2、留学生の生活

(1) 住居

井上角五郎宛の福沢の書簡によれば、明治 16 年 7 月 1 日の時点では留学生は三田の本

¹⁸ 明治 16 年 7 月 1 日付井上角五郎宛福沢諭吉書簡（『福澤諭吉書簡集』第 3 卷、307 頁）より抜粋。

¹⁹ 明治 16 年 7 月 19 日付福沢一太郎・福沢捨次郎宛福沢諭吉書簡（『福澤諭吉書簡集』第 3 卷、316 頁）より抜粋。

邸にいたことが分かるが、続く一太郎・捨次郎兄弟宛の書簡では、留学生は「六月中に来り」とあり、6月12日に旅だった福沢兄弟とは面識がないような書きぶりである。しかも、留学生が到着したのは5月20日である点からも、書簡での記述と齟齬がある。これをどのように理解するべきか。

恐らくこれは、留学生が最初は三田の本邸ではない所に案内された可能性があるということを示していると思われる。世話係を務めた飯田三治の回想では、「福沢先生は是等留学生を広尾の『狸ソバの別邸』に收容し」²⁰と述べられており、当初は広尾の福沢別邸に徐載弼以下の17人は收容されたようだ。留学生が来日した当時は、三田の福沢家は一太郎・捨次郎の留学準備に追われていたため、とてもその世話をすることはできなかったことが想像できるため、兄弟が留学に出かけるまでは全員広尾に收容されたのだろうと考えられる。そのため、6月になってから来たという書き方なのだろう。留学生が来日当初施設見学に出かけていたと考えられるのも、慶応義塾で指導する余裕がなかったためであるとも考えられる。

留学生の指導を担当し、当時慶応義塾の教員で後に塾長を務めた鎌田栄吉(1857-1934)の講演によると、三田の「庭内の一家屋を朝鮮人の寄宿部屋にして毎日教へて居りました」ということである。福沢兄弟の留学以降、留学生たちは三田に移り、当時まだ慶応義塾の構内に残っていた旧島原藩の長屋²¹の1つに住むようになったようだ。

(2) 学習

留学生が慶応義塾で学んだことは、主に日本語の読み書きであった。これは福沢の書簡にも記されている通りである。留学生は慶応義塾で日本語を学んだ後は「学生の人物を見分けて、例へば軍事に適する者は之を戸山学校に入れるといふ風に、警察、郵便、関税等と、夫々人に依り適当な科を修得させる」²²こととなっていた。つまり、慶応義塾は留学生を一括して受け入れ、その後専門的な知識を身に付ける前提として日本語を習得させる機関としての役割を担い、留学生の宿舎として生活の面倒を見る場所でもあったと見るべきである。

²⁰ 葛生東介編『金玉均』自費出版、1916年、96頁より

²¹ 慶応義塾の三田の敷地は江戸時代島原藩の下屋敷であり、その建物は明治期にも校舎として長く使われていた。

²² 飯田三治談。葛生東介編『金玉均』自費出版、1916年、96頁より。

(3) 生活

留学生は、慶応義塾からそれぞれの派遣先で専門教育を受けるようになった後も三田の慶応義塾に全員住んで生活していたようである。これは、明治 17 年になっても福沢や飯田が留学生の学費・生活費の工面をしていることから分かる²³。この学費の件は後述する。

鎌田の講演によれば、留学生は「寄宿舎の庭へ唐辛畑を作り」、「食事の毎に沢山唐辛を食って居った」ということで、本国の両班とは違い、自ら作業をして食べたい物を食べるといった習慣を日本で身に付けていたことが分かる。

3、飯田三治

ここまで留学生の世話係として何度も名前が出てきた飯田三治であるが、彼は福沢の遠縁にあたり、中津藩の出身であった。明治 5（1872）年に上京して慶応義塾に学び、その当時には書生として福沢邸に住み込みで働いていた。明治 9（1876）年に卒業すると中津に帰ったが、国会開設請願運動に参加して再び上京し、明治 15 年以降また福沢邸に住み込んで慶応義塾の「用務」に従事していたという²⁴。

飯田は非常に福沢からの信頼を得ていた人物であり、それが留学生を任された理由の 1 つでもあると思われるが、飯田三治本人の回想では、初めて金玉均が日本に来た際に福沢に紹介したのが飯田であったため、「金氏を始め朝鮮人とは深い関係を有つようになり、恰も福沢塾に於ける朝鮮係りと言ったような仕事にのみ携はって、所謂亡命客とか留学生を沢山私の手を依りて世話することになったの」²⁵だという。

金玉均は日本渡航前から朝鮮にあった京都・東本願寺の出張所に「屢々遊びに」行き、そこで日本の情報を得ていたという。また、福沢も当時展開していたキリスト教排撃論の関係で、東本願寺と懇意になり、東本願寺の渥美契縁（1840-1906）の依頼でキリスト教排撃の演説をするため、飯田以下福沢門下生は愛知県岡崎に派遣されるなどしていた²⁶。

²³ 明治 17 年 4 月 17 日飯田三治宛福沢諭吉書簡（『福沢諭吉書簡集』第 4 巻 127 頁）等参照。

²⁴ 三田商業研究会編『慶応義塾出身名流列伝』実業之世界社、1909 年、31 頁及び、葛生東介編『金玉均』自費出版、1916 年、94 頁参照。

²⁵ 葛生東介編『金玉均』自費出版、1916 年、96 頁より。

²⁶ 『郵便報知新聞』明治 14 年 6 月 20 日付記事より。この件は都倉武之「明治十三年・三河国明大寺村天主教徒自葬事件」近代日本研究第 18 巻（2001）に詳しい。

飯田自身が「屢次三河や京都の方へ出張していた」と述べているのがこれである。飯田は渥美と知り合い、日本渡航の志のある金玉均の存在を聞いて、実際に京都に金玉均が来たことが飯田に知らされると、かつて明治 12（1879）年に金玉均によって派遣された李東仁を福沢に紹介した石亀福寿（1853-1894）が金玉均を京都まで迎えに行き、福沢と金玉均の対面が実現したのだという。飯田三治は金玉均との関係があり、尚且つ福沢から信頼された門下生であるという人物であったため、留学生の世話係としてはまさに適任者であったと言えるだろう。

飯田は留学生の「文の教育より眠食の差図」といった監督・世話を務めたが、他にも明治 16 年 9 月 9 日に慶応義塾の正規課程に入学した金漢琦²⁷の身元保証人となるなど²⁸、まさに全面的に留学生の面倒を見ていたと言える。先に、甲申事変の際に朝鮮人留学生の人となりについて「諸学生に直接し其人と為りを知りたる人の話」として掲載された『時事新報』記事（明治 17 年 12 月 17 日付）を引用したが、この人こそ飯田であることは間違いないだろう。

IV、陸軍戸山学校と留学生

1、入学

慶応義塾で一通り日本語の読み書きができるようになった留学生は、それぞれその適する専門教育を受けるために様々な機関に派遣されたが、その中でも多くの生徒の進路となったのが陸軍戸山学校であった。陸軍戸山学校は射撃・銃剣・体操・喇叭といった近代歩兵戦術を士官・下士官が学ぶための日本陸軍の学校である。留学生の陸軍戸山学校入学についても『時事新報』は伝えている。

「朝鮮より留学の爲め我国に留学し居る少年十余人の内一名は士官の学業、他は皆下士の学術を伝習したき趣にて、此程其旨を外務省に願ひ出たる由。是れは朴泳孝氏の広州府に於て曩きに我戸山学校にて卒業したる申福模氏を教師として新式の兵を練磨するに

²⁷ 金漢琦は唯一慶応義塾正規課程に入社した留学生となった。（『時事新報』明治 16 年 12 月 25 日付雑報欄記事に期末試験を受けた人数に朝鮮人 1 名とある）後、明治 18 年 10 月 5 日には東京専門学校（現早稲田大学）に入学したが、帰国後金玉均の一党と目されて処刑された。

²⁸ 福澤研究センター編『慶應義塾入社帳』

著しき効験を見たるが故に、尚ほ此の如く容易に卒業して有益なる下士官を多く得んことを欲するためなりと云ふ」²⁹

この記事にあるように、留学生は戸山学校入学を外務省に願い出た。その結果、外務卿井上馨（1836-1915）の名前で陸軍卿大山巖（1842-1916）にその依頼がなされた。

「朝鮮人徐載弼外十三名、今般来航御省其筋ニ於テ軍事伝習受度旨願出候。右ハ学齡ノ適度体格其他成規モ可有之候得共、特別ノ課ヲ以志望相遂候様致度候。右志望ノ通り御差許相成候事ニ候ハ、兵隊ニ編入実地演習相成候歟、又ハ学校へ入学相成候歟。授業上之御都合ニ為随可用候得又修業上必要ノ架具ハ御差支モ無之候了、当分ノ内夫々御貸与被下候様致度、射的弾薬費此ノ如キハ追テ朝鮮政府若クハ本人共ヨリ補償為致候。二日ニ可取計候此段朝鮮政府ノ依頼ニ抛リ及御照会候也」³⁰

その結果、留学生の戸山学校入学は10月3日から許され、『時事新報』にもその姓名は掲載された。許可された14人の留学生は以下の通りである。

【表3】陸軍戸山学校に入学した留学生

徐載弼	申応漉	林殷明	鄭行徴	申重模	白楽雲	李秉虎
李建英	李奎完	尹泳観	鄭蘭教	朴応学	河応善	鄭鍾振

この内徐載弼1人は士官の学術、その他13人は下士の学術を学ぶこととなった。この入学の経緯としては、まず井上馨の文書にある通り、朝鮮政府からの依頼があったという。『時事新報』でも報じられているが、当時朴泳孝は広州府留守の任にあったが、その広州で新式軍隊の訓練にあたり³¹、その指導をかつて陸軍戸山学校で歩兵学術を学んだ申福

²⁹ 明治16年9月10日付雑報記事「留学武官」。

³⁰ 「9月4日 井上外務卿 朝鮮人の軍事伝習受希望に対する処置依頼」アジア歴史資料センター資料 C09121059000

³¹ 『時事新報』明治17年1月9日付雑報欄記事「朝鮮近況」によると、「申福^{マツ}摸を教師として日本式の兵士百名を訓練したり」とあるが、実際は1000名程を訓練していたという。琴秉洞『金玉均と日本 - その滞日の軌跡 - 』緑蔭書房、1991年、139頁参照。

模³²に任せていた。この新式軍は「近々朝鮮国王も其地に就て之を天覧せらるるとの噂あり」³³のように、当時開化策を徐々に進めていた朝鮮政府でも評価されていたと見られ、軍隊の強化を進めるべく、士官教育のために 14 人は戸山学校に入学するに至ったものとみられる。ただ、これらの留学生は元々別技軍の兵士であった者も多く、この「朝鮮政府の依頼」は留学した当初から留学生たちは帯びていたものと考えられる。

また、戸山学校での「射的弾薬費」など、必要経費は朝鮮政府に払ってもらうことが日本政府としての方針であったことが井上の文書から分かる。これは留学生が官費留学生としての性格を帯びていたため、当然のことであるが、後述する通り、この経費は実際には福沢や飯田が支払っていたことが推測される。

2、学習

戸山学校に入学した 14 人については、その後も『時事新報』で報じられており、10 月 29 日付の記事「韓人の勉強」では、「過日陸軍士官学校に入校したる韓人徐載弼を初め十八名の生徒は勸励衆に超へ、学業の進歩も速かる由にて校中の評判も極宜しと云ふ」と伝えられており、明治 17 年 2 月 28 日の雑報欄記事「朝鮮兵学生」では、「昨年の秋より陸軍外山学校に於て上下士官の修業に従事せし朝鮮人徐載弼外十四名の者は、昼夜其業に勉強し、殊に徐氏は朝鮮国の貴族なれども能く其校則を守り、十四名の生徒と共に毎日午前八時より午後四時までは学校にて運動其他の兵式を勉強し、日課を終り帰宿の後も自分にて規則を設け諸生徒を策励して兵書算術を研究するに付、最早来月頃は卒業するならんと云ふ」と書かれている。徐載弼らが近代戦術をよく学んでいたことが伺われる。徐載弼ら 14 人は帰国すれば朝鮮の近代軍の中核を担うことが期待されており、本人たちとしてもその自覚があったため、熱心に訓練に臨んだのだと思われる。

3、朝鮮の政情

(1) 金玉均の外債募集

留学生が日本で勉強していた頃は、金玉均の 3 度目の来日の期間と重なる部分が多い。

³² 申福模は明治 14 年 11 月、堀本礼造によって日本に派遣され、陸軍戸山学校を明治 15 年 10 月に卒業して帰国した。明治 17 年 12 月、甲申事変に参加して戦死。留学生申重模の兄でもある。

³³ 『時事新報』明治 16 年 9 月 28 日付雑報欄記事「朝鮮近況」より

金玉均は明治 16 年 6 月 28 日に東京に入り、明治 17 年 5 月 3 日に漢城に帰るまでの約 1 年間日本に滞在していた。このような長期間日本に滞在していたのは、金玉均が日本から 300 万円の外債募集をしようと考えたためである。

金玉均は朴泳孝に随行して明治 15 年 9 月に日本に 2 度目の渡航をした際、福沢諭吉の計らいで井上馨を通じ、横浜正金銀行から 17 万円の借款を手に入れ、そこから壬午事変の賠償金 50 万円の内、5 万円を支払い、武器の買入れや留学生の学費として残りを当てるなどして使っていた³⁴。この経験から、金玉均はさらに大きな金額、300 万円の借款を実現しようと画策して日本に来たのである。

金玉均が一時帰国していた明治 16 年 3 月当時は、清国の影響下で穏健な開化政策が取られており、清国から派遣されたドイツ人モルレンドルフ（1847-1901）が朝鮮政府の顧問として政務に参画していた。金玉均はモルレンドルフと同じ参議交渉通商事務の職にあったが、モルレンドルフとしばしば対立するに至っていたのである。モルレンドルフは財政難を打開するために新銭の鑄造を開始し、さらに清国から 20 万両の借款を得て、税関を整備して関税収入を得ようとしたが、金玉均は自国の鉱山などの資源を抵当に当てることで、日本から 300 万円の借款を得ることを提言し、新たに東南諸道開拓使兼捕鯨使という新設の官職に就いて日本に渡航した。金玉均はモルレンドルフに対抗するためにも、大きな成果を日本で上げる必要があったものと思われる。

しかし、東京に着いて早速 7 月 2 日に井上馨と会談した金玉均であったが、300 万円の借金は非常に大きく、担保としようとしていた鉱山の採掘量も定かではなかったため、井上に周旋を断られてしまったのである³⁵。当時竹添駐鮮公使はモルレンドルフら清国派と親しくして彼らの政策を支持していた³⁶ため、その上官である井上としても朝鮮の穏健開化策を支持して金玉均を冷遇したものと思われる。

金玉均は滞日中 12 月 19 日に戸曹参判という財務部門の次官に任じられるなどして、借款を得るための地位を強化されもしたが、結局何の成果も得られないまま明治 17 年 5 月に帰国した。その間、本国では明治 16 年 5 月にモルレンドルフによって税関が整備され、10 月 31 日には朝鮮に残っていた井上角五郎も参加した朝鮮初の新聞『漢城旬報』が発刊

³⁴ 「朝鮮人へ貸金の記憶書」（『福沢諭吉全集』第 20 巻）393 頁参照。

³⁵ 「井上外務卿朝鮮人金玉均ト談話筆記」アジア歴史資料センター資料 A03023653800

³⁶ 田保橋潔『近代日鮮関係の研究』朝鮮総督府中枢院、1940 年、919 頁等

されている。また、11月には上海に洋学を学ぶために留学生が派遣されている³⁷など、閔氏政権と清国派による穏健開化策は成功を収めていると言える状況であり、その中借款に失敗した金玉均の立場は極めて悪くなっていたと言えるだろう。

日本の陸軍戸山学校にいた徐載弼ら留学生は懸命に勉強していたと報じられていることは先にも述べたが、これは急速に立場を悪化させている金玉均や、朝鮮の急進開化のためにも自分たちの軍事技術がその助けとなると考えたためではないかと考えられる。金玉均としても、留学生が早くそれら近代文明の知識を身に付けることは自派の挽回のためにも必要だと考えていたと推測される。

(2) 朴泳孝の失脚

広州府留守の任にあった朴泳孝は申福模に命じて新式軍隊の調練を行っていたが、明治16年10月中旬、広州府留守の役を自ら辞任して、漢城に帰ってしまった。これは朴泳孝の兄朴泳教が暗行御史の役を罷免されたことによって、朝鮮の慣習によりその弟の朴泳孝も役を辞したということである³⁸。そして、朴泳孝が育てた新式軍隊は漢城に召喚され、閔氏政権派の韓圭稷の下に統合されて漢城において新式軍の調練が進められることとなった³⁹。

朴泳教は後に甲申事変に参加して戦死していることから、当時から急進開化派と見られていたことは疑いない。そのため、政権から睨まれて罷免されたものと思われるが、これによって朴泳孝もまた地位を失い、新式軍隊も奪われ、急進開化派は国内における勢力をほとんど失ってしまったのである。

V、学費問題

1、福沢と飯田のやり取り

明治17年4月、金玉均が帰国する直前に福沢諭吉は飯田三治に対して、留学生に関する書簡を送っている。

³⁷ 『時事新報』明治16年11月17日付雑報欄記事「朝鮮京城近況」より

³⁸ 『時事新報』明治16年10月9日付雑報欄記事「朝鮮京城通信」より

³⁹ 『時事新報』明治17年1月9日付雑報欄記事「朝鮮近況」より

「一昨日、次いで昨日、両度電報を以て在長崎金玉均之許へ、生徒之始末ニ付掛合候得共、何之返事も無之、弥以生徒ハ放却し去る之策ならん。就いては生徒より金へ、直ニ電信ヲ以て掛合候ては如何と存候。御考可被下候。」⁴⁰

この頃、300万円の借款にはぼ失敗しつつあった金玉均は、福沢に対して払うべき留学生の学費・生活費の支払いを延滞しており、その金額は明治17年初頭の時点で7647円60銭⁴¹に上っていた。しかし留学生は陸軍戸山学校を始め、各地で勉強を続けており、その学費の支払いは必要なことであった⁴²。この書簡内での「生徒之始末」とはこの学費問題について金玉均に問い質したものであると考えられる。

金玉均が東京に滞在していた期間は、留学生たちは毎週日曜日になると金玉均が逗留していた築地本願寺に出向いて話を聞いたり、励まされたりしていたというが⁴³、この時は福沢・飯田や留学生とも音信不通のまま長崎へ去り、そのまま帰国してしまったように読み取れる。このことによって、福沢と飯田は多額の負債を抱え込んでしまった。当時は慶応義塾の経営も厳しく、福沢個人としては2人の息子の米国留学にも多額の支払いをしている中であつたため、朝鮮人留学生のために大きな出費をすることは非常に大きな負担であつたと考えられる。しかし、この後も留学生は日本に留まって勉強を続けているため、福沢と飯田は学費よりも留学生の勉強を継続させることを優先し、学費に関しては一時的に窮しても、後回しとしているようだ。

2、福沢の貸金の理由

福沢はさらに他にも、金玉均に対して「開拓諸費」として8000円を貸しているのだが⁴⁴、どうしてこのような大金を貸し、留学生の学費についても負担するという考えに至ったのであろうか。その理由としては、金玉均を個人的に信頼していたことに加え、金玉均が朝

⁴⁰ 明治17年4月17日付飯田三治宛福沢諭吉書簡（『福澤諭吉書簡集』第4巻、127頁）

⁴¹ 現在の貨幣価値で1億円を超える。「朝鮮人へ貸金の記憶書」（『福沢諭吉全集』第20巻）392頁参照。

⁴² 前述した通り、例えば陸軍戸山学校では演習に必要な弾薬代などを朝鮮政府に請求することとしていたため、その支払いが必要であった。

⁴³ 『古筠』3号、徐載弼の回想より。琴秉洞『金玉均と日本 - その滞日の軌跡 - 』緑蔭書房、1991年、113頁参照。

⁴⁴ 「朝鮮人へ貸金の記憶書」（『福沢諭吉全集』第20巻）392頁参照。

鮮政府を代表して日本に来ていたため、最終的な返済については心配をしていなかったということが考えられる。当時は横浜正金銀行から金玉均が借りた金が5万円ほど残っており、「本国より来るか何れよりするか、時として文鎮の如き黄金の棒を五本も十本も携来りて福沢に保護を頼みたることさへある次第」で、「福沢に金の取替を依頼するも実是一時の事にして、窮余に借用を頼入るものとは大に趣を異にせり」⁴⁵と福沢が述べるように、外見では金玉均自身が支払いに困るような様子は全くなかったものと思われる。しかし、実際には金玉均は学費や借金を返さないまま一旦帰国してしまい、そのまま立場を急速に悪化させた結果、甲申事変を起こして逆賊として追われる身となり、当然この借金も支払えなくなってしまったのである。こうした結末は福沢としても予想するものではなかっただろう。そのため、当初福沢としては最終的には朝鮮政府から借金を返済してもらえることを当然期待していたものと思われ、そのためにこの多額の出資に至ったものと思われる。いずれにせよ、福沢が朝鮮の近代化・文明開化に並々ならぬ熱意を持っていたことはここからも分かる。

3、陸軍戸山学校生徒の卒業

金玉均の帰国後も徐載弼ら陸軍戸山学校に入った留学生は継続して勉強を続け、明治17年5月31日に卒業を果たした⁴⁶。その翌日、6月1日付で福沢は飯田に書簡を送っている。

「朝鮮生徒も今の如く相成候上は、之が為に金を費す事も出来不申、実は生徒の為にも不利と存候得共、金なしの輩、気の毒ながら如何ともすべからず。就てはさし向御手許の御都合如何。何れなにか仕事を見出す様致度候得共、是とても当節柄好機会も少し。先づ拙家家系の中より別封さし上候間、如何様にか御凌置被下度、実は沢山さし上度候得共、近来百方の不都合、唯今の処にては米国の学費に兼て一家の入費を算すれば不容易金円にて、所謂あるものを端からくひへらすの姿にて、出入固より相償ふべきにあらざ、不本意ながら右の次第に御座候。此段要用のみ申上度、早々頓首。」⁴⁷

⁴⁵ 「朝鮮人へ貸金の記憶書」(『福沢諭吉全集』第20巻)393頁参照。

⁴⁶ 『時事新報』明治16年5月30日付雑報欄記事「朝鮮人兵学卒業」

⁴⁷ 明治17年6月1日付飯田三治宛福沢諭吉書簡(『福沢諭吉書簡集』第4巻、150頁)

この時点で福沢も飯田もかなり困窮していることが伺われるが、それでも福沢家の家計から留学生の費用を支出することとしている。この書簡の冒頭で述べられている、今の如く相成った「朝鮮生徒」とは、戸山学校を卒業した留学生 14 人のことであると考えられる。卒業した上は、このために費用を使うことも出来ないということであろう。まだ慶応義塾には横浜税関など、他の施設で勉強している生徒も多く、戸山学校の留学生については早めに帰国を促すことにもなったのではないかと考えられる。

結果として、徐載弼ら 14 人は 7 月 1 日に東京を去り、朝鮮へ帰国した⁴⁸。既に金玉均の政府内での地位は低下しており、留学生としても早く帰国して金玉均を助けることが望まれたらうと考えられる。その際、徐載弼は陸軍省に願い出て、当時最新式の日本産銃、村田銃 1 丁の払下げを受けている。この銃を持ち、新式戦術を学んだ留学生は帰国した。しかし、まだ慶応義塾には 18 名の生徒が残って、それぞれの勉強を続けたのである。

VI、甲申事変と留学生の末路

1、清国派との対立

徐載弼ら戸山学校を卒業した留学生が帰国すると、その持てる知識を活かすため、士官学校を設立する計画が立案された⁴⁹。しかし朝鮮政府内の清国派の苦情や、清国の駐在武官袁世凱（1859-1916）の反対によってこの計画は中止となり、徐載弼らは無位無官の身となってしまったという。この士官学校設立は明らかに金玉均の提案であり、それを面白く思わない主流の清国派が潰したものとみられる。

しかし、徐載弼らを留学させたことについては、朝鮮国王高宗は評価していたようで、当時の島村代理公使に謝意を示すとともに、留学生たちを宮中に呼んで実際に学んだ戦術の実演をさせるなどした。これが明治 17 年 10 月の出来事であり、高宗は清国派に実権を握られつつも、日本派の金玉均らにも心を寄せていたようである。

7 月頃の段階から、金玉均や朴泳孝は武力を以て清国派を一掃する計画を密議していた

⁴⁸ 『時事新報』明治 17 年 7 月 4 日付雑報欄記事「韓人帰国」

⁴⁹ 「甲号 10.17 在朝鮮臨時代理公使 外務書記官島村久から井上外務卿宛」アジア歴史資料センター資料 C08052946800

ようだが⁵⁰、これはちょうど留学生の帰国の時期と重なるため、彼等を実行部隊として用いる計画は当初から進められていたのだと考えられる。そして、高宗個人の信頼もあって、武力による政権奪取を実際に考えるに至ったのだろう。

金玉均らがクーデターに奔った理由としては、8月に清仏戦争が勃発して、漢城に駐留する清国軍が半減して1500人にまで減ったことにより、クーデターによって出動する清国軍の勢力が少なくなったこと、そして、朝鮮政府内での清国派が金玉均らを流罪にしようとしているという風聞があり、身の危険が迫っていたことなどが考えられる。また、日本としても駐留清国軍が減ったことにより、日本の干渉の余地が広がったことから、10月30日に竹添公使を帰任させ、金玉均の一派を支援することとなったのである。

2、甲申事変における留学生

金玉均らのクーデター計画は、清国派の政府高官、閔台鎬・韓圭稷・尹泰駿・柳在賢らを殺害し、新政権を樹立するという点、その実行部隊として帰国した留学生を用いるという点は変わらず、いつどこで決行するかという点が変化していった⁵¹。最終的には、日本公使館で駐留している日本軍も巻き込んで王宮を占拠する計画が立てられ、12月4日にクーデターは実行された。

この日は新たに作られた郵政局の設立記念パーティーが昌徳宮近くで行われており、朝鮮政府の高官や駐在する外国使臣が集まっていた。金玉均や朴泳孝もこれに参加していたが、その際に清国兵に変装した留学生が会場の近くでダイナマイトを爆破させ、驚いて外に出た清国派の朝鮮政府高官を殺害するという計画であった。ここでの結果は、閔泳翊に重傷を負わせるに留まったが、金玉均と朴泳孝は直ちに王宮に向かって清国兵が市内で騒乱を起こした旨を高宗に訴え、景祐宮に移ることを奏請し、さらに高宗に要請して竹添公使宛に日本兵を率いて護衛にあたるように書状を送ったのである。

こうして日本兵150人と武装した留学生・申福模率いる旧広州府兵100人の護衛によって景祐宮に高宗が移ると、徐載弼以下14人の留学生は国王の警護のために正宮の護衛に就いた。そして、12月5日未明に政府高官が集まってきたが、徐載弼・李奎完を始めとする留学生はそれを待ち構え、朴泳孝の命令で閔台鎬・韓圭稷・尹泰駿・閔泳穆・李祖淵・

⁵⁰ 琴秉洞『金玉均と日本 - その滞日の軌跡 - 』緑蔭書房、1991年、148頁参照。

⁵¹ 田保橋潔『近代日鮮関係の研究』朝鮮総督府中枢院、1940年、928頁

趙寧夏・柳在賢らを次々と斬殺したのである。こうして金玉均一派と日本兵に守られた景祐宮内で新たに官位の任官が行われ、朴泳孝と徐光範が兵権を握るに至り、留学生は全員「別軍職」に就いた。

その後、昌徳宮に高宗は帰ったが、12月6日の午後、閔妃の要請を受けた袁世凱率いる清国兵1500人が王宮の総攻撃を開始した。日本兵は敗れ、高宗は王妃が避難した清国軍の兵營に向かった。この際に留学生7名、朴応学・鄭行徴・尹泳観・河応善・李秉虎・李建英・白樂雲が高宗に随行したが、清国軍によって殺害されてしまった。金玉均・朴泳孝・徐載弼・徐光範らは竹添公使とともに日本公使館へ敗走し、さらに仁川まで逃走、竹添公使は仁川に残り、金玉均らは日本に亡命することとなったのである⁵²。

この経緯を見ると、留学生は金玉均に信頼された武力として最初から最後まで扱われていたことが分かる。しかし結果として、クーデターの失敗によって真っ先に殺される対象となってしまった。

留学生14名の内、日本への亡命に成功したのは徐載弼・申応澂・李奎完・林殷明・鄭蘭教の5名である。また、高宗に随行した7名は全員殺害された。申重模は捕えられて、明治18年1月28日に死刑に処された⁵³。鄭鍾振は、北方に逃亡してロシアに逃れ、生き延びたという⁵⁴。

こうして朝鮮で武官となることが期待された陸軍戸山学校の卒業生は全員が朝鮮国内から去り、あるいは死亡したため、結果として日本で学んだ軍事技術が朝鮮の近代化に生かされることはないまま終わってしまったと言えるだろう。

3、日本に残った留学生

(1) 義捐金の募集

陸軍戸山学校を卒業した留学生は悲惨な結末を迎えたが、慶応義塾にはまだ留学生が残っていた。しかし、事変によって元々学費に窮していた留学生たちは、朝鮮政府から学費を請求する道を完全に閉ざされてしまったのである。そこで、事変から1か月が経った明治18年1月9日、『時事新報』上に「在東京朝鮮生徒ノ扶助」と題する広告が掲載された。

⁵² 以上、田保橋潔『近代日鮮関係の研究』朝鮮総督府中枢院、1940年、琴秉洞『金玉均と日本 - その滞日の軌跡 - 』緑蔭書房、1991年より記述。

⁵³ 『時事新報』明治18年2月16日付朝鮮事件欄記事「独立党の処刑」

⁵⁴ 琴秉洞『金玉均と日本 - その滞日の軌跡 - 』緑蔭書房、1991年、925頁より

ここでは、日本に残っていた 18 人の名前が列挙された後、

「右十八名の中、彼の国王陛下の特旨を以て官費を給する者あり、又或は父兄より私費の者もあり。然るに今回の変乱に際しては、学費給与の道を断絶したるのみならず、家郷の消息さへ不通の有様なれば、固より安んじて勤学の心もなく、去りとて早々帰国せんとすれば都て此生徒の身分は素と開化の文物を慕ふて来航したる者にて、今日韓廷の風潮に適せざるのみか、日本に久しく寄留したる後進生とあれば、其日本の名を以て帰国直に支那人の毒手に罹る可や明白のことにして、此まま東京に留まるに手段なく、又本国に帰るに道なく、進退維谷りたる窮鳥と申す可き有様なり。就ては小生等は従前東京三田の慶応義塾にて前書の人々渡来の即日より様々に助力周旋したる縁故もあり、旁以て今其窮迫を傍観するに忍びず、仰ぎ願わくは大方慈善の諸君子多少の捐金を以て一時の扶助を与え給はんこと、懇請の至りに堪へず（後略）」

と、留学生が日本に留まるのにその資金がなく、帰国すれば直ちに殺されてしまうだろうという切迫した事態を訴え、時事新報社か交詢社へ義捐金を送ることを呼びかけている。

この広告は慶応義塾長浜野定四郎・時事新報社員岡本貞然・同じく飯田平作⁵⁵・飯田三治・時事新報社長中上川彦次郎⁵⁶の連名で掲載されており、慶応義塾の関係者が留学生の支援のために慶応義塾・時事新報社の上層部も動いていたことを示し、飯田三治もまた留学生のために尽力していたことが伺われる。しかし、この数日後に、金鶴羽を名乗る朝鮮人が『東京横浜毎日新聞』に、「其の厚意は深謝るれとも朝鮮人は此の議に同与したる者なし。然るに此の広告の出づるは甚だ疑はしと謂ふべし。因て小生自から変通の工夫是れあり候に付堅く日本好恤諸君に右件を謝絶す」⁵⁷として、義捐金を断ってしまったのである。結局、3月31日になって時事新報に再び広告が掲載され、「去年の京城事変以後日本に在りて流浪の身と相成り居候士人等に贈り可申候」として、当時潜伏状態だったため名前は明らかにされていないが金玉均や朴泳孝にこの義捐金は送られることとなった。金鶴羽なる人物が何者なのかは不明であるが、時事新報で大々的に開化派であるように広告されて

⁵⁵ 飯田三治の兄。

⁵⁶ 福沢諭吉の甥。

⁵⁷ 『福沢諭吉書簡集』第4巻解題395頁より

しまったことから、本国の政府からも睨まれることを恐れた留学生の誰かではないかと推測されるという⁵⁸。あるいは潜伏していた金玉均が同様の理由で留学生に類が及ぶことを避けるため、広告を出したとも考えられる。

(2) 連行の危機

甲申事変の処理として、井上馨が渡鮮して明治18年1月9日に漢城条約が結ばれた。これで、日本公使館が焼失したこと、多数の日本人が殺害されたことについて謝罪の修信使が日本に送られることとなり、徐相雨とモルレンドルフが来日することとなったが、この2人は日本に来ると留学生を含めて一切の在日朝鮮人を連れて帰るつもりであると『時事新報』で報じられた⁵⁹。金玉均派が一掃され、親清派が政権を握った朝鮮に戻れば、留学生は命の危険すらある状況であったため、「留学生の内、開化主義の者は未だ承諾」⁶⁰せず、さらに18名の連名で徐相雨とモルレンドルフに意見書の提出をする⁶¹など、帰国に対して頑強に抵抗していた。そして、最終的には兪性濬と嚴柱興の2人だけが修信使の帰国に随行して帰国し⁶²、他の16名は命令を聞かずに日本に留まったのである。

慶応義塾の留学生ではないが、朴泳孝が陸軍士官学校に託した留学生朴裕宏は、日本人の陸軍将校の援助によって学校に残り、「本国の開明に進む日に非る以上は、死すとも決して帰国の途に就かずと断言」⁶³していたという。これは日本に残った16名の慶応義塾の留学生も同様の意見であっただろう。修信使が帰国した後、16名の学費についても工面ができたらしく、留学生たちは引き続き日本に留まって勉強を続けることができたのである。

Ⅶ、むすび

以上、ここまで明治16年5月に金玉均によって慶応義塾に派遣された留学生について、当時の公文書・新聞記事・関係者の書簡を基に甲申事変後までの経緯を述べてきた。ここから分かることは、福沢諭吉が朝鮮人留学生に対して多大な配慮を示し、飯田三治とともに生活・学費の面でまさに身を切って支援をしていたという事実である。それほどこの留

⁵⁸ 同上。

⁵⁹ 『時事新報』明治18年2月6日付朝鮮事変欄記事「日本在留朝鮮生徒」

⁶⁰ 『時事新報』明治18年3月6日付朝鮮事変欄記事「朝鮮留学生」より

⁶¹ 『時事新報』明治18年3月10日付朝鮮事変欄記事「留学朝鮮生徒の意見書」

⁶² 『時事新報』明治18年3月25日付朝鮮事変欄記事「朝鮮生徒」

⁶³ 『時事新報』明治18年4月16日付朝鮮事変欄記事「韓人朴有宏氏」より

学生たちには朝鮮の近代化を進める人材となることを期待していたとみるべきであろう。しかし、金玉均の立場が悪化して甲申事変を起こして失敗し、多くの士官生徒が死亡する惨事となった挙句、朝鮮は清国への属従を強める結果となってしまったのである。そのため、福沢はこの状況に絶望し、明治18年3月16日に『時事新報』に社説「脱亜論」を掲載するに至った。これ以後、慶応義塾には日清戦争後まで10年に渡り、新たに留学生が来ることはなかったのである。

日本に亡命してきた陸軍戸山学校の卒業生、徐載弼は、日本政府の冷遇のため、朴泳孝・徐光範とともに、明治18年5月26日にさらに米国に向けて横浜港を出て行った。その後生涯のほとんどを米国で過ごし、植民地時代には米国において独立運動に関与し、1947年に帰国して李承晩と対立するなど、長命を保って朝鮮の独立に関与し続けた。

また、日本に残った留学生も、引き続き本国からの帰国の圧力を受け続けていた。しかし、明治18年の後半にもなると、甲申事変で休刊した『漢城旬報』が井上角五郎の尽力で再び『漢城周報』として再刊されるなど、穩健開化策が再び進み、留学生も徐々に帰国する者が出てきた。特に日清戦争後の甲午改革で親日派政権が成立すると、朴泳孝とともに元留学生李圭完や申応澗は官吏として活躍し、植民地時代にも朝鮮人官僚として李圭完は咸鏡南道知事、申応澗は黄海道知事に就く⁶⁴など、独立を失った後ではあったが留学時に学んだ日本語を活かして長く働いた。

このように、明治16年の留学生は短期間の留学生活や、甲申事変の発生により、その事績は埋もれてしまっていたが、このように生き残った者は独立運動家、朝鮮総督府の官僚といった形で、日本で学んだ知識を活かし続けたものと思われる。

金玉均も明治27(1894)年に閔氏政権によって上海で暗殺され、日清戦争の後に朝鮮は清国との冊封関係を解消したが、日本やロシアの圧迫を受けて独立国としての形はますます遠のき、結局日本の植民地とされて滅んでしまった。こうした過程を考えると、留学生に当初期待された朝鮮を独立国とするために近代文明の諸制度を学ぶという役割は中途にして終わってしまい、大きな効果をもたらすことはなかったと言える。しかし、近代日韓関係史において、こうした留学生が存在したという事実は記憶されるべきものではないかと考える。

⁶⁴ 琴秉洞『金玉均と日本 - その滞日の軌跡 - 』緑蔭書房、1991年、925頁より

参考文献

● 1次史料

時事新報社『時事新報復刻版』龍溪書舎、1986年

慶応義塾編『福沢諭吉書簡集』岩波書店、2001年

慶応義塾編『福沢諭吉全集』岩波書店、1958年

慶応義塾福澤研究センター編『慶應義塾入社帳』慶應義塾、1986年

国立公文書館アジア歴史資料センター <http://www.jacar.go.jp/>

外務省編『日本外交文書』日本国際連合協会、1952年

● 回想録等

葛生東介編『金玉均』自費出版、1916年

井上角五郎『金玉均君に就て』中央朝鮮協会、1936年

石河幹明『福沢諭吉伝』岩波書店、1932年

鎌田栄吉「義塾と朝鮮との関係」三田評論 249号、1918年

飯田三治「義塾懐旧談」三田評論 243号、1917年

● 研究論文等

田保橋潔『近代日鮮関係の研究』朝鮮総督府中枢院、1940年

琴乗洞『金玉均と日本 - その滞日の軌跡 - 』緑蔭書房、1991年

永井道雄、原芳男、田中宏『アジア留学生と日本』日本放送出版協会、1973年

阿部洋「福沢諭吉と朝鮮人留学生-1895年朝鮮政府委託慶応義塾留学生の場合を中心に-」
福沢諭吉年鑑 2号、1975年

都倉武之「福沢諭吉の朝鮮問題―「文明主義」と「義侠心」をめぐって」寺崎修編『福
沢諭吉の思想と近代化構想』所収、慶應義塾大学出版会、2008年

박기환 「근대초기 한국인의 일본유학-1881년부터 1884년까지를
중심으로-」 일본학보 40号、1998年

李垠松 「俞吉濬の日本留学に関する一考察 - 朝鮮開化派と福沢諭吉の関係を中心として
-」 教育学研究集録 25号、2001年

李吉魯「19世紀後半における朝鮮人の日本留学 - 最初の日本留學生が派遣される経緯を中心として - 」教育学雑誌 37 号、2002 年

山辺健太郎「朝鮮改革運動と金玉均 - 甲申事変に関連して - 」歴史学研究 247 号、1960 年

崔碩莞「甲申政変期の井上角五郎 - 日本の甲申政変企図説の再検討 - 」日本歴史 533 号、1992 年

都倉武之「明治十三年・三河国明大寺村天主教徒自葬事件」近代日本研究 18 号、2001 年

阿部洋「旧韓末の日本留学 - 資料的考察（I） - 」韓 3 卷 5 号、1974 年

魯在化「福沢諭吉と兪吉濬の開化教育に関する比較考察」一橋研究 12 号、1988 年

青木功一『福沢諭吉のアジア』慶應義塾大学出版会、2011 年